北区飛鳥山博物館だより

ぼいす

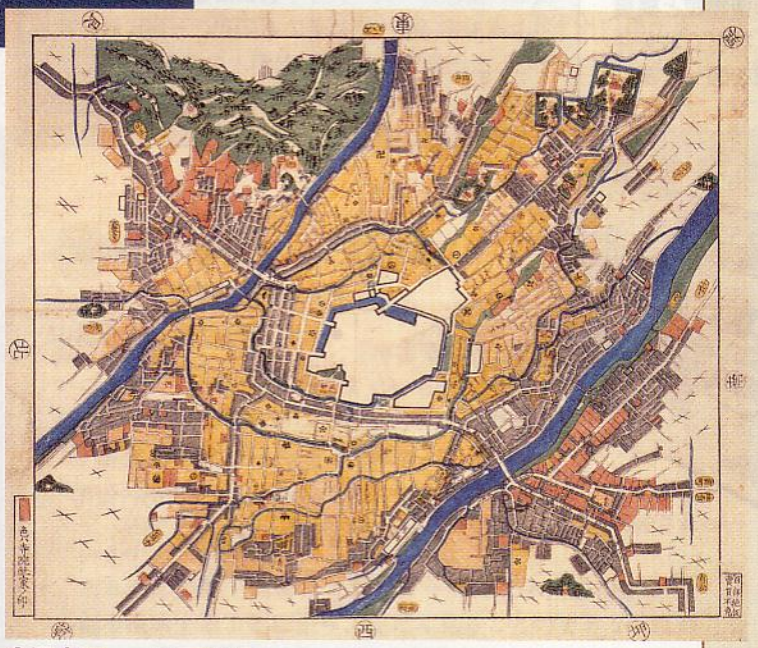
Vol. 1

北区飛鳥山博物館
1998年9月15日発行

秋の企画展

古地図の愉しみ

～ 山下和正コレクションより ～



金沢之図　江戸後期

このたび北区飛鳥山博物館では著名な現代建築家山下和正氏と知り合う機会に恵まれ、氏の所蔵する古地図コレクションの一部を展示させていただくことになりました。

山下氏の手懸けられた青山のフロムファーストビルや六本木ピラミデなどはご存じの方も多いのでないかと思います。建築家としてのお仕事の傍ら東京工業大学教授も勤められ古地図の収集も精力的に進められました。山下氏のもう一つの肩書きは国際古地図収集家協会（IMCOS）日本代表です。山下氏は知る人ぞ知る地図コレクターで、その所蔵する古地図は1万数千点にも及びます。そのコレクションは世界図・日本全図・国絵図・江戸図・地方図・道中図・河川図・社寺図・温泉図等とても多くのジャンルから成り立っています。企画展では古地図がもつ魅力をテーマに江戸時代から明治時代までのさまざまな古地図を展示します。実際に皆さんにご覧いただけるのはほんの僅かの資料にすぎませんが、膨大な山下コレクションの一角を垣間見ることができればと思います。また、会期中に山下氏の記念講演会（11月8日予定）も開催する予定です。地図の収集について楽しいお話が聞けることと思いますのでご期待下さい。

今後博物館では、機会のあるごとに山下氏のコレクションを展示していく予定です。

【会　期】

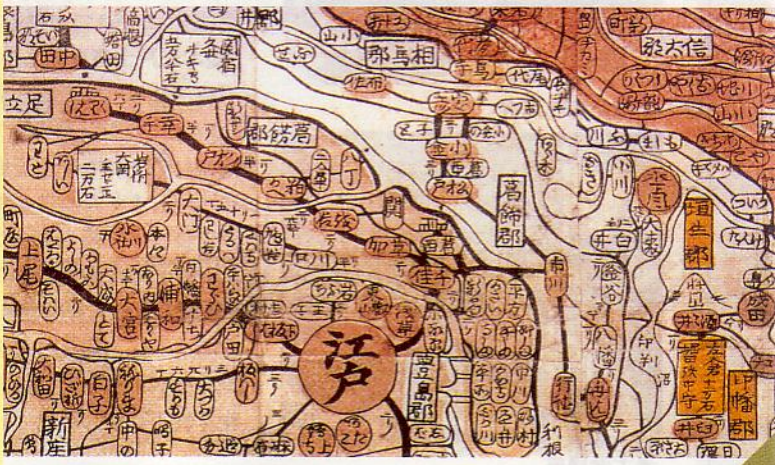
平成10年 **10月 1 日(木)**
～
11月23日(月)

※観覧時間は午前9時30分から午後5時

【会　場】北区飛鳥山博物館2階　特別展示室

【休館日】10月5日(月)、12日(月)、13日(月)、19日(月)、26日(月)、11月2日(月)、4日(水)、9日(月)、16日(月)

入　場　無　料



大日本国郡全細見図（部分）　嘉永元年（1848）

はじめまして！

北区飛鳥山博物館は平成10年3月27日にオープンしました。

ごあいさつ

北区飛鳥山博物館は、昭和63年2月策定の第二次北区基本計画で計画事業として位置づけられたのが最初であり、基本構想、建築・展示の基本設計、実施設計などを策定し約10年の歳月を経て開館の運びとなりました。当館の設置目的は、区民の生涯学習の振興に寄与するとともに、広く教育、学術の向上と地域文化の発展に資することです。ただ単に、地域の生涯学習施設の一つとしてだけではなく、子供から高齢者の方まで、誰でもが気軽に立ち寄ることができる、再び来たくなる施設として機能させていくことが重要と考えています。

北区には、武蔵野台地と東京低地、そして低地を形成した河川があり、地理的にも自然的にも恵まれています。このため、当館では「大地・水・人」を基本コンセプトとして、北区の考古・歴史・民俗・自然を中心とした常設展示を展開しました。常設展示は、北区を象徴する展示、オリエンテーションのための展示、そして14のテーマ展示により構成されています。

当館は、北区立飛鳥山公園の中にあること、渋沢史料館及び紙の博物館と隣接していること、ＪＲ・都電・地下鉄の各駅の近くに位置すること、など立地条件に恵まれています。この条件を最大限に生かして、設置目的の達成を図ってまいりますので、是非ともご来館願います。

～北区飛鳥山博物館のめざすもの～

北区飛鳥山博物館のテーマは「大地・水・人」です。人々は自然とのたたかい、調和の中で生きてきたのです。私達の祖先の生きざまを知ることは、明日の私達の生き方を探る手がかりです。

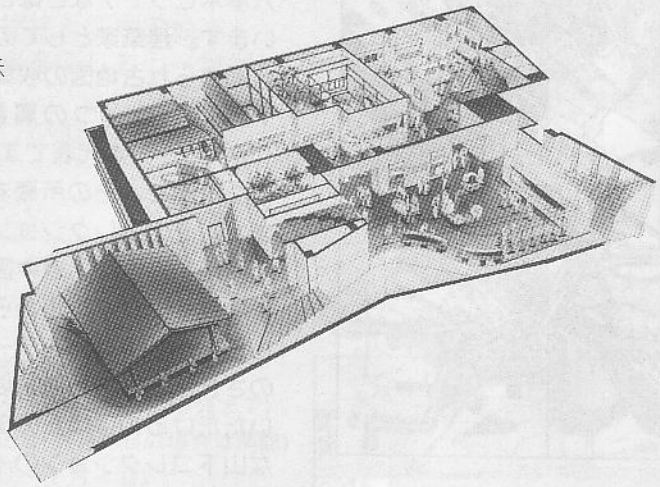
北区飛鳥山博物館では、人々の足跡を自然とのかかわりの中で展示しています。当館の学芸員は、皆様と展示品との間をつなぐ役割をもっています。展示品が語ろうとしていることを引き出して、皆様の理解の手助けをします。そして次は、皆様の一人一人が学芸員になりましょう。よりよき未来に向けて、その方向をご一緒に考えましょう。北区飛鳥山博物館は皆様と共に歩きます。

（名誉館長　小林三郎）

【常設展示】

豊島郡衙正倉と14のテーマ展示

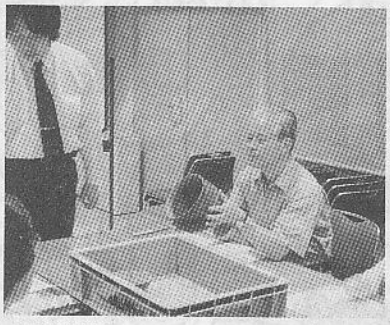
★ 豊島郡衙正倉
- 大地のおいたち
- 最古の狩人
- 縄文人のくらし
- 弥生人のムラ
- 古墳時代の夜明け
- 豪族と民の時代
- 律令社会と豊島郡衙



- 水と大地の支配者たち
- 名所王子・滝野川・飛鳥山
- 日光御成道の風景
- 荒川と共に生きるくらし
- 東京近郊の野菜と種苗
- 地図にみる北区の近現代
- 荒川の生態系

イベント・レポート

開館記念講演会



考古学講座

開館後、多彩な事業を行ってきましたが、そのうち代表的なものをご紹介しましょう。

4月29日に行った開館記念講演会では、当館名誉館長で明治大学教授の小林三郎先生が講師となり、**「むかしの飛鳥山」**と題して飛鳥山遺跡を中心に弥生文化についてお話しました。6月の古文書講座**「絵本江戸土産を読もう」**では『絵本江戸土産』の風趣溢れる絵図を読み解きながら、江戸時代中期の江戸庶民の生活について解説しました。**「年中行事を楽しもう」**では志茂地域に伝わる昔ながらの七夕を再現しました。供え物の小麦まんじゅうを作ったり、笹竹に短冊を飾ったり楽しい一時を過ごしました。また6月から7月にかけて毎週日曜5回連続の**「考古学講座」**を開きました。熱心な考古学ファンが集まり、土器等に直接ふれていただくなど、古代人の生活用具を身近に感じてもらい好評のうちに講座を終了しました。

年中行事を楽しもう～七夕～

絵本江戸土産を読もう

常設展示・ここがオススメ

～飛鳥山劇場に行こう～

常設展示室の中にひときわ目立つ「ブキミ」な怪奇ゾーン、じゃない、江戸花見体験ゾーン、これが飛鳥山劇場です。ここは八代将軍徳川吉宗の金輪寺御成御殿の一部が忠実に再現されています。金輪寺とは江戸時代、王子権現、王子稲荷社の別当寺です。王子の地は将軍家の鷹狩り場に設定されており，三代将軍家光の時に休息所として、金輪寺に御殿が設けられていました。

吉宗はこの御殿を拡張して、花見の場である飛鳥山に向かって舞台を築き、江戸の新名所・飛鳥山に集う庶民の楽しみを、ともに楽しむために、しばしば御成を行いました。この御成御殿を再現するために、古い資料を調べ上げましたが、復元のもとになった史料は旧幕府作事奉行のもとにあった絵図面と、江戸の文人、大田南畝の記すところの「金輪寺の什物帳」です。これらの資料をもとに将軍の御座の間と障壁画などの書院装飾を再現しました。

王子・飛鳥山・滝野川は、春は花見、夏は滝浴、秋は紅葉見、冬は雪見と四季それぞれの景物に恵まれ、また王子の名料理屋は稲荷詣でをする江戸のグルメたちの舌を喜ばしました。こうした一年を通じた魅力スポットの様子を、コンピュータ制御の狂言回しや吉宗、さらに狐の化身の「あやしい女性」が、みなさんを江戸時代の飛鳥山の行楽の場に誘います。どうぞ、飛鳥山劇場で楽しく化かされてみて下さい。

飛鳥山劇場の狂言回し

情報ボックス

博物館・あの部屋この部屋

～３階閲覧コーナー～

常設展示をご覧になって、「博物館の資料って、以外に少ないなあ」とおっしゃる方がよくいらしゃいます。しかし博物館のぼうだいな資料のほどんどが、収蔵庫に集められています。これらの資料は特別・企画展示に登場する日を待って、じっと息を潜めています。また地域の歴史・文化を研究する上で、欠かすことのできない文献は3階の密集書架に収蔵されています。

これらの資料・図書はコンピュータに電子化されていて、これを検索することにより、ふだん見ることのできない江戸時代の錦絵の世界をのぞいたり、収蔵資料の様子を探ったり、あるいは文献で北区の昔の姿を知ることができます。こうした検索を行うコーナーが、閲覧コーナーです。ここでは画面にふれるだけの方法でかんたんに操作できます。操作がわからない時は、受付に申し出てください。やさしく使い方をお教えいたします。収蔵資料・図書資料の検索のほかに、江戸時代の北区の名所を紹介するメニューや、代表的な遺跡を示すメニューもあります。

また常設展示を構成する14のテーマに対応したクイズも楽しめます。初級・中級・上級の3コースあり、ちょっと手強いですよ。さあ、情報端末にあなたもチャレンジしましょう。

閲覧コーナーは、図書やビデオの閲覧の他、コンピュータを使って錦絵等の資料検索、そしてクイズが楽しめるお得なコーナーです。一度立ち寄ってみて下さい。

収蔵図書のご紹介

～絵で描いた日本文化・日本人論　ビゴーの『また』～

ビゴー（1860～1927）は、フランスの画家として、明治15年に来日し、西欧のジャーナリズムを代表する在日通信員となり、文明開化の社会を題材に多数の作品を描いた人です。代表作に『トバエ』（明治20年～23年）があり、条約改正問題や内外政局に揺れる明治初年の様子を戯画に描き、また表面的な文明開化に浮かれる人々を風刺しました。しかし館蔵品の『また』はこうした作風とは異なり、明治時代の都市・東京に生きる庶民の生活を実に情感あるタッチで描き、その暖かみのある筆致は江戸時代以来の生活の連続面を、何気ない仕草から表現しています。表層の近代化を支える日本人の生の息吹きが今に伝わってきます。

ビゴーが描いた「植木職」

ほっと一息…

桜の名所・飛鳥山博物館3階にあるカフェ・ヴァーチュは、区民の憩いの場所として、博物館見学、桜見物の休憩スポットとしてオープンしました。

おすすめは、2種類のケーキが楽しめるケーキセット650円、480円からのお得なスパゲッティ類など、お気軽にご来店下さい。

カフェ・ヴァーチュの明るい店内

弥生時代の石器

―飛鳥山遺跡出土の太型蛤刃石斧―

石器というと縄文時代の道具のイメージが強く、弥生時代は青銅器や鉄器が使われた時代と思われがちですが、実は弥生時代でも石器は暮らしの中で主要な道具でした。“大陸系磨製石器”と呼ばれる石器がその代表例です。この“大陸系磨製石器”は文字通り中国大陸や朝鮮半島に起源を持つ石器です。その種類は、木の伐採に使用する“太型蛤刃石斧”や木を加工する“扁平片刃石斧”・“抉入柱状片刃石斧”。そして稲穂を摘み取る“石包丁”があります。

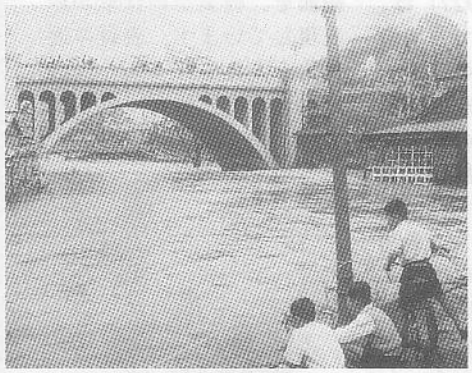
今回紹介する石器はその中の“太型蛤刃石斧”です。“太型蛤刃石斧”の名は刃の形が両刃で蛤の形に見えることから付いたものです。1964年に王子工業の宇野信四郎教諭によって飛鳥山遺跡の発掘調査が行われ、弥生時代中期後半（約2000年前）の住居址からこの“太型蛤刃石斧”が出土しました。石斧は完全な形をしており、全長14.1cm、最大幅6.0 cmのややずんぐりとした形状をしています。また、重量694 gを測ります。この石斧は伐採用なので他の石器よりも重く丈夫な石を使っています。この“太型蛤刃石斧”は真っすぐなやや太い枝を柄としています。柄には孔を穿ちそこに差し込んで縄等で固定して使われました。

“太型蛤刃石斧”を含む“大陸系磨製石器”は弥生文化を代表する石器です。飛鳥山遺跡は後の調査で環濠集落という弥生時代独特のムラの形態であることが確認されましたが、このことと共に“大陸系磨製石器”の出土は、この地に本格的な稲作が到来していたことを証明するものといえます。なお、その後の調査において“石包丁”を除く他の“大陸系磨製石器”も出土しています。

石斧の装着例

写真に見るあの日あの時

～昭和33年（1958）9月 音無橋下～



芦田正次郎氏撮影

この写真には、この年9月26日に東日本一帯を襲った狩野川台風（台風22号）により石神井川が氾濫し、当時音無橋下にあった民家の２階まで浸水している様子が写しだされています。

石神井川は江戸時代以来、その渓谷と紅葉の美しさで知られていましたが、戦後には急激な住宅地化によって生活排水が河川に流れ込み汚染が一気に進みました。その上、土の地面が失われたため、雨水は河川に集中し、大雨のたびに洪水を起こすようになりました。特に王子駅周辺は川幅が狭くなっている上、２ヶ所で直角に曲がっているため水が溢れやすく、河川改修を望む声も高くなっていったのです。

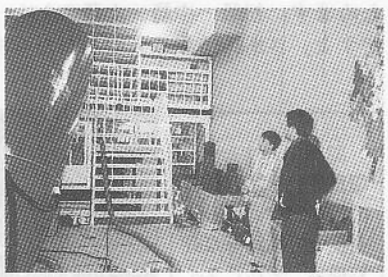
その最中に見舞われた狩野川台風の被害は甚大で、北区内の床上浸水戸数は5063戸、王子駅改札口は2mもの深さの水にのまれてしまい、2、3日その水は引かなかったそうです。

その後、昭和43年に音無橋上流部から飛鳥山下を通るバイパス水路が完成、川沿いの護岸も強化され洪水は起こりにくくなりました。しかし、かって錦絵に描かれた紅葉は失われ、川は身近にありながら遠い存在となりました。近年は遊歩道や公園が整備され、人と川との関わりが見直されています。

Q&A

Q．燻蒸とは何ですか？

A．燻蒸とは収蔵品に付着する生物を薬品によって殺虫することを言います。博物館では年に1、2回定期的に燻蒸を行っています。燻蒸には常温で気体となる臭化メチル、酸化エチレンといった薬剤を使用します。燻蒸剤は有害なので漏洩のないよう細心の注意を払って行われます。燻蒸方法にはいろいろありますが、当館では博物館の地下１階にある一般収蔵庫、特別収蔵庫の２室全体を密閉して行います。燻蒸作業は業者に委託します。



燻蒸作業の様子

Q．古いモノはどうやって手に入れますか？

A．資料の収集は博物館の性格や目的に従って行われます。収集方法には以下の様なものがあります。採集は自然科学資料において用いられます。考古資料は主に発掘調査によります。購入は個人、業者などから買い入れる方法です。この他に寄贈、交換、寄託等があり、また実物資料のレプリカの制作というのもあります。浮世絵、古書等の紙資料は購入が多く、民具等は寄贈品が多くなります。

博物館についてご意見、疑問などございましたら、どしどしご投稿下さい。お待ちしています！

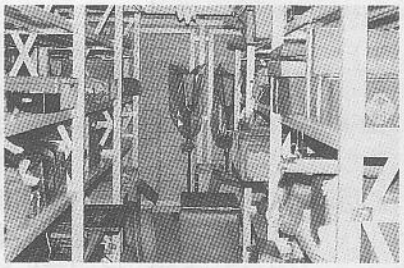
研究室から

桜の開花宣言と同時に開館して9月末でまる半年、各種講座や企画展準備などに追われる日々が続いています。当然ながら初めての経験も多く、戸惑い、あわてながら、一日が飛ぶように過ぎてゆきます。

もっとも開館前から淡々と継続している活動もあります。資料の収集や整理もその一つです。博物館にとって資料は命、資料の蓄積が館の土台となります。しかし資料は特別な場合を除いて一気に集まるものではありません。現在当館で所蔵している資料も、その大部分が博物館建設前に収集したものです。そこで北区のプレ博物館の時代について少しお話したいと思います。

昭和34年10月、最初に郷土資料室が区役所内に開設されました。40m²ばかりの小さい部屋からのスタートでした。その5年後の昭和39年4月には区政資料準備室（昭和46年に区政資料室に改称）となり面積も70m²に広がりました。当初展示資料は土器などの考古資料を中心に約200点程と少なく、担当職員は資料集めに奔走し、参考資料も一から整えていきました。昭和48年には資料も約1000点に増え、その甲斐あって利用者も年間1万人前後にまで伸びています。収容能力が限界となっていた丁度その頃、王子5丁目の十條製紙跡地に公団住宅が建設されることになり、うち同社の研修施設であった西記念館が区に譲渡されることになりました。北区立郷土資料館はその施設を利用して昭和52年2月にオープンしたものです。寄贈を中心に資料数は急激に増えましたが、収蔵スペースが乏しく、やむなく屋外に倉庫を建てて対応していました。温湿度管理もできず、密集した倉庫は保存環境としては劣悪で、約1万点にまで増えた資料に対して、その場その場をしのいでいるといった状況でした。平成10年早々に郷土資料館から博物館に資料を移転しましたが、設備の整った収蔵庫に一同に収められた資料を見て、ようやく肩の荷がおりたというのが正直な気持です。

開館後も資料の寄贈申し出は数多くあります。また錦絵など購入する資料もあります。すでに収蔵庫も8割がた埋まっていますが、必要な資料は収集していかなければなりません。これからもコツコツと博物館の土台を固めていく作業は続きます。

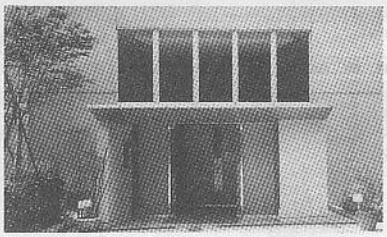


収蔵庫内の様子

博物館めぐり　第1回　紙の博物館

このコーナーでは、様々な博物館を皆さんにご紹介していこうと思います。記念すべき第1号は、当館のお隣「紙の博物館」です。

紙博では、まずパピルスと雁皮（がんぴ）が出迎えてくれます。パピルスはエジプトなどで古代から長い間、書写材料として使用されていた植物。ちなみにこの“パピルス”という語がPaper（英）、Papier（独・仏）、Papiro（伊）等の欧州各国の“紙”の語源となったのです。一方、雁皮は和紙の材料となります。



扉の向こうは紙の世

そして一歩館内に足を踏み入れると、金色に輝く『聖徳太子御影』（奥田元宋画）が目に飛び込んできます。この絵は360cm×270cmという圧倒的な大きさ。そして驚くことに、使用されている紙は一枚にすいた和紙なんですって！一体どんな風にこの大きな紙をすいたのでしょう。「でも、どうして紙の博物館に聖徳太子？」と思っているあなた、紙博に行けばその答えがわかるはずです。

さて、2階では紙パルプの原料や製造工程が紹介されています。ビデオコーナーでこれらを、とてもわかりやすく説明してくれますのでおすすめです。

3階では日本の明治以降の製紙産業の歩みを紹介。王子は我が国における「洋紙発祥の地」なのです。そして4階へやってきますと、ここでは紙の歴史を学ぶことができます。紙が普及する以前に、世界各地ではどのような書写材料が使用されていたのでしょうか。

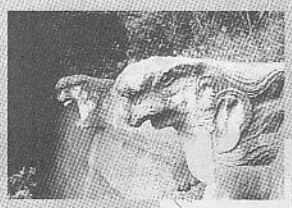
先に挙げたパピルスはその一つですよね。そして紙はいつ頃、どこで発明され、どのように広まったのでしょうか。果たして日本で紙の使用が始まったのはいつのこと？ここではそんな疑問に答えてくれるはずです。

紙博では紙すき教室や映写会が毎週楽しめます。また特別展・企画展や実演・講習会など充実していますので、是非足を運んでみてはいかがですか。

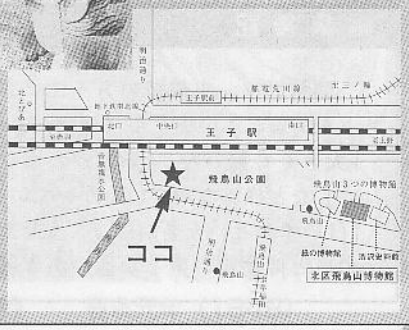
● 北区内・おもしろスポット！ ●

初回ということで飛鳥山公園内の穴場を紹介します。

飛鳥山北部の石垣の中に狛犬が2体挟まっているのをご存じですか。かって飛鳥山には14世紀頃に紀州熊野神社から勧請された飛鳥明神があり、狛犬はその明神の遺物です。寛永11年に明神社は王子権現の境内に移され、今では明神の姿を偲ばせるものは狛犬のみとなりました。何故このような形で安置されたのか理由は定かではなく、2体の狛犬は戦前から石垣の間にあったという事です。かっては金色の眼をしていたという狛犬も、体半分は石垣に埋められ、今ではその全貌を見ることはできません。しかし、獅子を思わせる豊かなたてがみは当時の威厳ある姿の名残と言えます。この他にも飛鳥山には「飛鳥山碑」をはじめとする五つの碑があります。石造物巡りをしながら公園内を散歩してみると新たな発見があるかもしれません。



見つけられるかな？



皆さんも、近所にこんな所がある、変なものを見かけた、などの情報をお持ちでしたらご一報ください。

Museum Calendar ミュージアム・カレンダー 9月～3月

9月	15日(火)	北区・12ヶ月めぐり（全12回）
	26日(土)	ビデオ&トーク
	27日(日)	講座「江戸名所図会を読む」（全5回）
10月	7日(水)	年中行事を楽しもう―月見
	24日(土)	ビデオ&トーク
11月	5日(木)	遺跡探訪（全2回）
	28日(土)	ビデオ&トーク
12月	5日(土)	講座「鬼平犯科帳に見る王子」
	12日(土) 13日(日)	親子土器拓本教室
	19日(土)	講座「近代文芸と滝野川」
	20日(日)	年中行事を楽しもう―年越
	26日(土)	ビデオ&トーク
1月	8日(金)	自然史講座（全8回）
	23日(土)	ビデオ&トーク
	30日(土)	講座「北斎と江戸の絵本」
2月	2日(火)	考古学講座（全5回）
	13日(土)	講座「広重と江戸の絵本」
	27日(土)	ビデオ&トーク
		講座「錦絵と江戸の絵本」
	28日(日)	年中行事を楽しもう―雛祭り
3月	13日(土) 14日(日)	講座「江戸のグルメ」
	21日(日)	六阿弥陀巡り
	27日(土)	ビデオ&トーク

企画展
「古地図の愉しみ」
山下和正コレクションより
10月1日～11月23日

民具展（仮称）
12月8日～2月28日

お耳を拝借！

・ミュージアムトーク
毎週土曜日の午後一回、学芸員による常設展示の解説を行っています。詳しい時間についてはお問い合わせ下さい。

・ビデオ&トーク
毎月第四土曜日にビデオの上映会を行い学芸員が解説を致します。毎回ビデオの内容は変わります。10・11月は考古学の世界を予定。

・年中行事を楽しもう
歳時に合わせた年中行事を実際に体験していただく講座です。

・講　座（連続）
6月に第1回を開催した考古学講座は大変好評をいただきました。今日も同じ内容で初めての方でも理解出来る初級考古学講座となっています。自然史講座も始まります。

・北斎/広重と江戸の絵本
北斎と広重の版画（錦絵）を見ながら、江戸の絵本を読みます。

・遺跡探訪
都内の古墳を学芸員と共に見学します。健脚の方におすすめ。

・鬼平犯科帳に見る王子
早くも時代劇ファンの方々から熱い注目を集めています。

・六阿弥陀巡り
内三つは北区外にあります。全部回れるかな。

利用のご案内

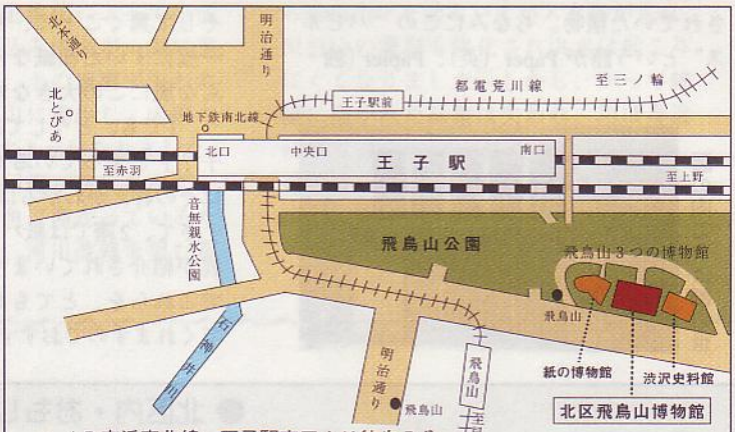
【開館時間】 午前9時30分～午後5時
（有料の展示室への入場は午後4時30分まで）

【休館日】 毎週月曜日（国民の祝日・振替休日の場合は開館）
年末年始（12月28日～1月4日）
国民の祝日および振替休日の翌日（土曜・日曜日の場合は開館）このほかに臨時休館日等があります。

【常設展観覧料】

	個人	団体
一般	300円	240円
小・中・高	100円	80円

・小学生未満は無料
・団体扱いは20名以上
・三館共通券は当館のほか、渋沢史料館、紙の博物館の3館をごらんになれます。
（一般720円　小中高320円）



・ＪＲ京浜東北線　王子駅南口より徒歩5分
・営団地下鉄南北線　西ケ原より徒歩7分
・都電荒川線　飛鳥山停留所より徒歩4分
・都バス茶51、草64、王40各系統　飛鳥山停留所より徒歩2分

編集後記

開館以来、来館者の方々にアンケートを実施していますが、「建物がきれい」「大きくて驚いた」「順路がわかりにくい」など様々な声をいただいています。「ぼいす」という名前は、こうした皆様の声と博物館の声とが通いあう紙面を目指したい、という思いからつけたものです。手さぐりで作った第1号ですが、より良い内容にしてゆきたいと思いますので、ぜひ皆様の声をお寄せ下さい。

（K・K）

北区飛鳥山博物館だより
ぼいす Vol.1
発　行　平成10年9月15日
編　集　北区飛鳥山博物館
〒114-0002 東京都北区王子1-1-3
TEL. 03-3916-1133
発　行　東京都北区教育委員会
〒114-0002 東京都北区王子本町1-2-1
TEL. 03-3908-1111（代）
印　刷　添田印刷

刊行物登録番号　10-2-018